

る」。⑤「リスクに賭けないリスク」を喧伝する。  
⑥世に「商品」(利益追求のツール)にならない  
ものはないと教える。⑦個人金融資産をリスク市  
場におびき出す――など。

イスラム圏を市場化するため、イラク攻撃に先  
立ってヘリテージ財団やロバート・マクファーレ  
ンらによって主導された「フリードマンの原則」  
\*5「\*6」は、まず財産権の確立をあげ、株式  
会社の必要と意味を説く。「会社は株主のもの」  
という通俗概念(法人擬制説)が強調された。

「会社は誰のもの」――日本で新しい装いの議論  
がにわかに盛り上がった背景に、新たなお狩り場  
を求めるマネー資本主義、目的遂行を容易にする  
グローバル化の進展、世界的な過剰ドルの存在な  
ど、それなりに理由のあることを、私たちは知っ  
ておいたほうがよい。

### 背景に「世界的過剰マネー」の存在

もともと株式市場も株式会社も、資金・資本と  
いう資源が希少であることを前提に成り立つ。カ  
ネ(資金)が不足がちだからこそ、調達を容易に  
する証券市場があみ出され、証券市場がまた株式  
会社の成長、拡大を支えた。時代的变化に応じて  
成長を持続するために必要な設備投資、資材の購  
入、働く人びとへの報酬など、企業は絶えず追加  
資金を必要とする。だからこそ、会社は株式市場  
に自社株を上場し、随時にひと、もの、かねの整  
合的運用をはかったのである。制度の最大の特徴  
は、資金の出し手、すなわち株主の責任を「有限」  
としたことだった。

いま、この「資金」と「会社」のバランスは逆  
転した。世界的にマネーが過剰となり、会社の資  
金需要は縮小している。マネーの持ち手は、投資  
先はむろん、投機先にも事欠く構造が長期につづ  
く。余剰となったマネーはどこに殺到するか。原  
油市場をみれば分かるはずだ。会社を商品として  
売買の対象となすTOB、経営者自らが発行株式  
を買い戻すMBOなど、燎原の火の如く燃え広が

っていく。不思議でも何でもない。

いま、あらゆる領域で「投資ファンド」の組成  
は容易となり、格別の才能などなくとも日本版ミ  
ルケンは可能だ。ミルケンが自己正当化した「会  
社は株主のもの」説を、新しげに流布することで、  
「紙くずを札束に変える狐」の輩出は容易となる。  
すでに数多の「日本狐」が闊歩している。

それでも「会社は株主のもの」と真顔で主張す  
る人がおれば訊きたい。JR西日本の株主のなか  
に、あの痛ましい事故犠牲者の霊前に合掌した人  
はあったのか。株主とは所詮、株の売り買い、差  
益、配当に関心をもつ自然人、法人を指す。それ  
以上でも以下でもない。

会社に「ゴーイング・コンサーン」として旋風  
を起こし、運動体としての持続性を維持している  
のは、そこで生き、働き、暮らしを支える「人間」  
のほかに存在しない。

「日本の論点2006」文芸春秋より